

### 学術集会報告 日本スポーツ整形外科学会 2025 (JSOA 2025)

医療法人社団 TSOC 理事長、TSOC 北参道院長 菅谷 啓之



日本スポーツ整形外科学会 2025 (JSOA2025) を 2025 年 9 月 12 日 (金) と 13 日 (土) に東京・芝のザ・プリンス パークタワー東京において開催しました。今回は JOSKAS と JOSSM が合併して 3 回目の開催となり、第 1 回の広島、第 2 回の早稲田に続いての開催で、新生本学会の方向性を色濃く打ち出すことに重きを置いて企画しました。学会のテーマは、知と技 (Expertise) in Orthopaedic Sports Medicine とし、サブタイトルとして 1. Athlete Management 2. Sports & Arthroplasty としました。これは JSOA 学会員のメインテーマともいえる、我が国のトップアスリートを含むスポーツ選手を如何に支えていくかということ、また、昨今のスポーツ熱の高まりのなか、変形性関節症や腱板広範囲断裂を来した中高年が、人工関節置換術を経てどこまでスポーツが可能になるのかをテーマとしました。JSOA2025 の特徴は、①アクセス・レイアウト共に最高の会場を用意したこと、② 35 名の外国人講師 (AOSSM トラベリングフェローとゴッドファーザーを含む) を招聘し、第 1 会場・第 2 会場を中心に豊富な英語セッション (同時通訳付き) を組んだこと、③世界的には一般的であるが本邦ではほぼ皆無であったライブサージェリーを TSOC 北参道から配信したことです。参加者総数は 1917 名で、医師 1145 名、メディカルスタッフ 571 名、学生 45 名、その他の方々 156 名と昨年より 100 名ほど少なくなっていました。ただ、用意した 10 会場すべての会場で、活発な議論が繰り広げられ、参加者の方々からは、“聴講したいセッションが重なっていて困った”、“英語セッションやライブサージェリーをもう一度視聴したい” という声を多数いただきました。また、他学会との重なりや都合で参加できなかった方々のために、12 月から 2026 年 1 月 12 日まで、第 1 会場と第 2 会場のみオンデマンド配信

を行っております。興味のある方は、学会参加者および JSOA 会員に配信されましたメールからアクセスをお願いします。学会運営に関しては不行き届きの点多々あったかと思いますが、本学会で発信された情報をもとに、日本のスポーツ医学がますます発展し、より多くの競技者およびスポーツ愛好家のメディカルサポート体制が充実していくことを確信しております。最後に、ご参加およびご協力くださった皆様、JSOA 会員の皆様に厚くお礼申し上げます。

#### オンデマンド配信のご案内

【参加登録済の方】登録時のメールアドレスとパスワードでログインしてください。

【参加登録未済の方】参加登録料 (10,000 円) を決済後に視聴可能です。

Web 抄録閲覧 : <https://pub.conf.it.atlas.jp/ja/event/jsoa2025>

参加登録 : <https://jsoa.conf.it.atlas.jp/login>



閉会式後の記念写真。国内外招待者と TSOC スタッフ。



Special Lecture1 を担当して頂いた史野根生先生と井樋栄二先生。



全員懇親会のひとコマ。左下は伊達公子さんと AOSSM トラベリングフェロー。ゴッドファーザーの Brian Busconi (左から 2 人目) は小生の 20 年来的友人。



会長晩餐会での守屋秀繁千葉大学名誉教授を囲んだひとコマ。左から、石橋恭之理事長、私、筒井廣明先生、守屋秀一先生 (御子息)、松本秀男 JOSSM 先々代理理事長、中村憲正副理事長

## 2025 Outstanding Young Investigator Award (OYIA) 受賞者のことば

岡山大学病院 川田 紘己



このたびは、栄誉ある OYIA 賞にご選出いただき、誠にありがとうございます。研究のご指導を賜りました尾崎敏文教授、古松毅之先生をはじめ、同門の先生方に深く感謝申し上げます。本賞の対象の研究は、半月板治療、特に内側半月板後根断裂に関する一連の取り組みであり、岡山を中心に長年にわたり継続してこられた先生方のご尽力の賜物です。この受賞を励みに、今後も膝関節温存治療の発展に寄与できるよう一層精進してまいります。今後とも何卒よろしく願い申し上げます。

国立スポーツ科学センター/関東労災病院 後藤 和海



この度は栄誉ある OYIA 賞を授与いただき誠にありがとうございます。今回の対象論文はすべて市中病院でおこなった臨床研究になります。市中病院での臨床研究のみでも本賞をいただけたことが、後進の先生方への励みに少しでもなれば幸いです。数々の臨床研究ができましたのも、関東労災病院スポーツ整形外科の歴代の先輩方や同僚の先生方が質の高い診療と地道なデータ収集を継続して下さったお陰です。この場をお借りして改めて感謝申し上げます。これを励みに日本のスポーツ整形外科に少しでも貢献できるような臨床研究を続けていければ幸甚でございます。

弘前総合医療センター 對馬 誉大



この度は栄誉ある OYIA 賞を授与いただき、誠にありがとうございます。本賞に御選考いただいた理事の先生方に感謝申し上げます。本賞を授与できたのも、フェローシップなどで見学にいらした先生方と昼夜問わず熱くお話をさせていただけたことで、研究する意義を強く感じる事ができたからだと考えます。今後は患者さんのための臨床と研究を続け、さらに後輩の指導にも取り組んでいきたいと思っております。何卒よろしく願いいたします。

## 2025 和文論文賞(若手奨励論文賞) 受賞者のことば

山形県立新庄病院 長瀬 貴明



このたびは若手奨励論文賞を賜り、誠に光栄に存じます。本研究は野球肘検診時の調査を基に、睡眠の重要性を再認識する機会となりました。山形県では超音波による検診を 20 年以上継続し、予防啓発に努めてきました。今回の成果はその取り組みから生まれたもので、睡眠や生活習慣の観点からも学生野球に貢献できれば幸いです。今後も臨床と研究の両面から発展に尽力いたします。

名古屋市立大学 花木 俊太



この度は若手奨励論文賞に選出いただき、大変光栄に存じます。本研究では、Pivot shift grade 3 症例に対し、ACL 再建に加えて膝の外側支持組織である前外側靱帯(ALL)を併せて再建することで、回旋安定性と半月板治療に与える影響を検討しました。ご指導いただいた野崎正浩先生をはじめ、名古屋市立大学膝・スポーツ班の諸先生方に深く感謝申し上げます。今後も臨床へ還元し、膝スポーツ外傷治療の発展に貢献できるよう努めてまいります。

### 今後の学術集会

schedule

#### 日本スポーツ整形外科学会 2026 (JSOA 2026)

会 期 2026 年 8 月 27 日(木)～29 日(土)  
会 場 札幌コンベンションセンター  
会 長 中村 憲正(大阪保健医療大学 教授)  
テーマ 情熱×科学-スポーツ整形の未来を拓く-  
URL <https://www.congre.co.jp/jsoa2026/>



#### 日本スポーツ整形外科学会 2027 (JSOA2027)

会 期 2027 年 6 月 17 日(木)～18 日(金)  
会 場 札幌コンベンションセンター  
会 長 佐藤 和毅(慶應義塾大学 教授)

これから開催される学術集会の情報は、学会ホームページに随時更新中





# Traveling Fellow 報告記

## GOTS 2025

帝京大学 豊岡 青海 (左)

関西医科大学/早稲田大学 永元 英明 (右)



2025年5月、GOTS-Asian Traveling Fellowshipとして、ドイツ・オーストリア・スイス・ルクセンブルクの計13施設を28日間にわたり訪問させていただきました。各地で温かいご支援を賜り、臨床・研究・教育のいずれにおいても多くの学びを得ることができました。

臨床面では、前十字靱帯再建に大腿四頭筋腱を積極的に活用すること、回旋不安定性に対するLET併用、high posteromedial portalを用いたramp修復、さらに関節軟骨再生医療への前向きな取り組み、日本未導入の最新医療器械(リバーズ型人工肩関節や骨軟骨損傷に他するコラーゲンシート・ヒアルロン酸シート等)など、日本ではまだ一般的とはいえない工夫を数多く拝見いたしました。加えて、多くの施設でモーションアナリシスとパフォーマンステストを外来動線に組み込み、評価スペース・リハ室・診察室を近接配置することで、復帰判定や再受傷予防に迅速なフィードバックを行う体制が整備されておりました。データ管理・解析を担うスポーツサイエンティストがチームの中核を担い、外科・リハ・評価の専門分野が高いレベルで機能している点は、今後の診療運営に大いに示唆を与えるものでした。スポーツ整形外科において、言うまでもなく手術療法のみならず保存療法も極めて重要です。アスリートファーストの医療を提供する上で、このようなハード面のみならず理学療法士やトレーナーなどのコメディカルスタッフとはもちろん、ソフト面としてスポーツサイエンティストとも関係を深めて、専門性が高くなり高度化されてきているデータサイエンスにも対応しながら、エビデンスベースの医療を提供する環境を整備する必要があると感じました。

また、各国の制度・文化の違いが術式選択やインプラント、費用対効果の意思決定に及ぼす影響を現場で実感し、アウトカムとコストの両立を意識した治療の重要性を再確認いたしました。社会保障費の増大は欧州でも共通課題であり、限られた資源の中で質を担保する「システムとしてのスポーツ整形」の視点が求められていると感じました。

文化交流の面では、独語圏の主要施設にて指導医・若手医師と幅広く交流し、延べ8都市・13病院で100名を超える専門家と意見交換を重ねました。学会や施設見学、地域イベントを通じて信頼関係を築き、共同研究・相互訪問・学会発表の具体的な芽を得ることができました。さらに、韓国のKOSSMからのフェローと1ヶ月間寝食ともに過ごすことで、強固な友情でつながることができました。国境を超えて生涯付き合える友人を得られたことは、一生の宝物になります。

このような素晴らしい機会を与えてくださいました国際委員会の選考委員の先生方をはじめ、我々を推薦してくださった先生方に心より感謝申し上げます。今回得た知見とネットワークを日本の診療・研究・教育へ着実に還元し、アジアと欧州の架け橋として継続的な交流を育んでまいります。末筆ながら、貴重な機会を賜りました関係各位に深く御礼申し上げます。



オーストリアのドナウ川沿いのクレムスで開催された GOTS 2025 にて。



GOTS 2025 Welcome Reception にて。左から長谷川翔一先生(東京科学大学)、Dr.Du-Hyun Ro、豊岡、永元、Dr. Du-Han Kim。



スイス Grindelwald の First Cliff Walk にて。左から時計回りに、Dr.Du-Hyun Ro、永元、Dr.Elena Neunteufel、豊岡、Dr.Du-Han Kim。



オーストリアのザルツブルグ城にて。



# 女子ラグビーワールドカップ帯同報告

立命館大学 篠原靖司



皆さんは女子ラグビーの試合を観たことはありますか？オリンピックで行われている7人制女子ラグビーの試合は、もしかしたら一度は目にすることがあるかもしれません。また、男子15人制ラグビーの試合はテレビ放送があるのでご存じの方も多いと思います。男子と同じように女子にも15人制ラグビー競技があります。2025年8月23日から9月28日までイングランドにて女子15人制ラグビーワールドカップが開催されていました。私は2019年から女子15人制ラグビー日本代表のチームドクターとしてチームに携っており、前回(2022年NZ大会)に引き続き、今回も本大会に帯同させていただきました。女子15人制ラグビーワールドカップは2025年大会で第10回を迎え、日本代表は3大会連続出場を果たしています。

女子15人制ラグビー競技は、男子と全く同じルールで行われていますので、スクラムやタックルなど、男子さながらのコンタクトプレーが行われています。さらに、年々、スピード、パワー、スキルのレベルが上がっており、プレー強度も数年前と比べても格段に高くなっています。そのため、傷害の種類も脳振盪から前十字靭帯損傷など多種多様で、発生数も非常に多いです。

代表チームとしての帯同時における我々メディカルチームは、チームドクター1名、トレーナー1~2名、コンディショニングスタッフ1名(トレーナーとSCコーチの間をつなぐ役割)の3~4名体制で、選手、スタッフを合わせて約50名程度のチームをサポートしています。チームに帯同している時は、基本的に全ての傷病に対処しなければいけませんので、私は整形外科医ですが、内科や婦人科疾患の処置をしている方が多いような気がします。

ラグビーは非常に強度の高い競技であるため、試合後は多くの時

間がリカバリーに費やれます。ワールドカップは予選で4チームの総当たりとなっており、上位2チームが決勝トーナメントに進出することができます。基本的に試合は6~7日毎に行われるため、試合が終わるたびに、5~6日をかけて全選手のコンディショニングを整えて次の試合に臨みます。次戦に向けて、ケガした選手が出場できるよう間に合わせていくのは当然ですが、ほとんどすべての選手は試合に出ると身体中に痛みを感じていますので、メディカルチームはあの手この手を駆使し、彼女たちを試合までにいかにフレッシュな状態にできるかということに尽力していきます。

今回のワールドカップは、さすがラグビー発祥の地イングランドでの開催ということもあり、国をあげてのイベントとなっていました。予選3試合は全て別の都市で行われたため、ノーザンプトン⇒エクセター⇒ヨークと試合が終わるごとに移動していきましたが、いずれの都市も我々を温かく迎えてくれました。街を歩けば、選手はサインや写真を求められ、我々スタッフにも温かい応援の言葉をいただきました。チームは3戦し1勝2敗と残念ながら目標とする予選突破はなりませんでした。本大会で31年ぶりの勝利を得ることができました。大会中は大きな傷病者を出すことなく、全員で掴み取った次につながる1勝になったことはメディカルとしてチームをサポートしてきた甲斐がありました。

女子15人制ラグビーはこれからますます強くなっていくと思います。機会があれば、観戦してみてください。非常に面白いので、その魅力にハマること間違いありません。推しになって一緒に女子15人制ラグビーを盛り上げて下さい。



女子日本代表で初めて50キャップ(試合)出場を果たした斎藤選手のチーム記念写真

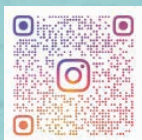


代表チームスタッフ

## 【日本スポーツ整形外科学会(JSOA)公式SNS開設のお知らせ】

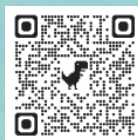
JSOAでは、学術集会や学会事業の情報ははじめ、JSOA関連の情報を発信していくために、SNS: Instagram、X(旧Twitter)のアカウントを開設し、2025年9月より運用を行なっています。

会員の皆さまにとって有益なツールになるよう努めてまいりますのでまだご覧いただいていない先生方におかれましても、SNSアカウントをご登録の上、フォローしていただければ幸いです。



Instagram

アカウント jsOA\_official

URL [https://www.instagram.com/jsOA\\_official/](https://www.instagram.com/jsOA_official/)

X

アカウント JSOA\_official

URL [https://x.com/JSOA\\_official](https://x.com/JSOA_official)



## 日本相撲協会診療所の紹介

日本相撲協会診療所 川崎隆之



財団法人日本相撲協会は 2025 年に設立 100 周年を迎えた伝統ある相撲興行団体です。診療所はその直属機関として 1958 年墨田区千歳に設立されました。その後 1985 年に現在の両国国技館地下一階へ移転され、今日まで慶應義塾大学医学部や同愛記念病院・都立墨東病院などの近隣医療機関の協力により支えられてきました。診療所は国技館地下の広い敷地を活用し、レントゲン・透視 X 線・超音波・高精度脂肪計測装置 (BOD POD)・物療資器材などが揃っています。常勤医は糖尿病内科 (菊地徹洋所長) と整形外科 (川崎) の 2 名体制で、その他呼吸器・循環器・外科外来があり、コメディカルの看護師 3 名・技師 1 名・事務 1 名とともに業務を担当します。整形外科は 2021 年より前任が退職され不在となっており、私は 2 年前に一般公募で入职しました。

診療所の役割は三つあります。一つは場所中の安全管理です。年に 6 回開催される本場所では怪我が多く発生します。比較的大きなものは診療所に搬送されることが多く、初期対応に当たります。2024 年より救命士・トレーナーを本場所期間中の土俵脇や施設内に常駐し、力士の競技環境や有事対応を強化しました。二つめは健康管理として、力士志望者が入門時に受ける「新弟子検査」と、約 600 名の現役力士や協会役員を対象とした「健康診断」を毎年行ってお

り、これには一般的な検査のほか、心臓超音波検査や体脂肪測定などが含まれます。全ての力士は協会に所属しており、身体や競技に関する記録が一元的に管理されていることは、健康管理を進める上で大きな利点となっています。三つめは平時の診療で、主に診療所を受診した力士や協会の診療に当たります。力士や協会の診療は無償であり、福利厚生の一部となっています。

2025 年 10 月には英国の伝統的劇場ロイヤル・アルバート・ホールの 100 周年記念に招待されて公演を行いました。5 日間の期間中 5000 人収容する劇場は連日満員御礼の幕を飾り、12 年ぶりに行われた海外巡業は大変盛況で、英国の人々に相撲の魅力を伝えることができました。来年は私のパリ巡業を予定しており、診療所医師はこれらをサポートする役割を担います。大相撲は古来神事として行われ、伝統的興行の側面を持つ本国起源の競技であるため、他の欧米スポーツとは安全や健康に対する考え方や習慣の異なるところがありますが、独自の伝統を遵守しつつ、現代スポーツ医学の知見を取り入れていくことは診療所のもう一つの役割と考えています。



2025 年ロンドン公演 (於ロイヤル・アルバート・ホール)



診療所内



国技館の外観

## 編/集/後/記

JSOA ニュースレターも第 5 号となりました。JOSKAS と JOSSM の合併後 3 回目の開催となった JSOA2025 (会長：菅谷啓之先生) は、久しぶりの Live surgery もあり、大盛況のうちに幕を閉じました。安達伸生教授が合併後初の学会の形を切り開き、熊井司教授がその道を拓かれ、菅谷啓之先生がそれを充実させてくださったことで、今回の実りへとつながったのだと実感しております。多くの受賞者、そしてトラベリングフェローの活躍を目にし、学会のさらなる発展への期待と、その一員である誇りを改めて感じました。

オリンピックやワールドカップのない年は“オフイヤー”と思われがちですが、2025 年にも注目すべき大会は少なくありません。

ん。MLB、NPB、J リーグといった定番スポーツは今年も楽しませてくれましたし、私が興味を寄せていた女子ラグビーワールドカップと大相撲ロンドン公演には、私が勝手に“仲良し”と思っている先生方が帯同され、今回スポットライトを当てさせていただきました。どちらも示唆に富む内容で、改めてスポーツ現場に関わりたいという思いを強くしました。

安全にスポーツへ取り組むには医療の支えが欠かせませんが、政治の安定もまた重要だと痛感する昨今です。政治に影響を及ぼすことはできなくとも、医療に関しては本学会を通じて世界と渡り合える研鑽を積んでいきたい——そう思わせてくれた一年でした。

田中誠人  
大阪けいさつ病院

